

新 会 員 の 声



「関わりの中で」

新地町立駒ヶ嶺小学校 村上 潤一

新任校長として半年、コロナ禍の中で「今できる最高の〇〇を！」を合い言葉に、教職員一丸となって教育活動を展開してきました。制限の多い学校生活の中でも、子ども達は様々な場面で素敵な表情を見せてくれます。特に、学級や他学年の友達、先生方と直接関わっている時の表情は輝き、満足感や充実感が感じられます。これまで、当たり前のように見てきた子ども達の笑顔や真剣な眼差しも、学校という環境の中でしか見られない貴重なものなのかも知れないということを実感させられました。

重点目標「みんなで！こつこつ とことん」の達成に向け、「みんなで」楽しんだり、相談したり、協力したり… そんな機会を多くつくりながら、何事にも主体的に粘り強く取り組む児童の育成を目指していきたいと思います。今後とも諸先輩方のご指導・ご助言をどうぞよろしくお願いいたします。



「毎朝の真剣勝負」

南相馬市立上真野小学校 高野 伸一郎

着任して半年が過ぎ、やっと 74 名の子ども達の顔と名前が一致してきた。元来物覚えが悪く、学級担任時代も、学級の子どもの名前を覚えるのに時間がかかった。日常生活がマスク顔では尚更である。それでも「〇〇さん、おはよう」と声をかけると、驚きと同時に子どもの表情がパッと明るくなる。顔半分がマスクに隠れていても、子どもの目が気持ちを代弁する。それが嬉しい。逆に名前を間違えた時には訝しげな眼差しが返ってくる。毎朝の真剣勝負である。当分、自作の名前カードは手放せない。コロナ禍の中、校長として「何ができるのか」「資源をどう活用するのか」「特色ある学校をどう創造するのか」力量不足のため自己評価は低い。今は、教職員や地域の方々に支えられながら、なんとか校長職を務めている。相馬地方校長会の諸先輩の皆様方からのご指導とご助言を、よろしくお願いいたします。



十指有長短

相馬市立大野小学校 伊東 敏勝

4 月に大野小学校長を拝命し、着任いたしました。初任者として 4 年間小学校での勤務経験はありますが、30 年という時を経て戸惑うことが多々ありました。でも、大野っ子の明るい笑顔に元気をもらい、職場のスタッフ、保護者の皆様のご協力により、運動会や発表会等も行うことができ、充実した日々を過ごしております。校長室には『「十指有長短」厚生大臣齋藤邦吉書』という額が掲げられております。郷土の偉人の書です。「十本の指には長短があって、それぞれの個性や役割が皆違う。」という意味です。その個性を生かし、互いに力を合わせることで、大きな力を発揮することができます。この言葉を新任校長への教えと受けとめ、使命感と決意を新たに、地域の宝、未来への宝である子どもたちのために誠心誠意努めていく所存ですので、校長会の皆様、ご指導・ご助言をよろしくお願いいたします。



シベリアからの使者たち(10月相馬上空)

編 集 後 記

ちょっと短くなった夏休み。半年以上ぶりにラウンドする機会に恵まれました。猛暑中ではありますが、「三密」を気にすることなく歩く芝生の絨毯は、なんとも最高でした。With コロナとは言いますが、一時でもコロナから解放されるストレスフリーな瞬間は、メンタル的にも貴重な時間だと感じました。第 132 号発行にあたり、玉稿をお寄せいただいた相馬市教育委員会教育長様をはじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げます。



令和 2 年 12 月 4 日
相馬地方小学校長会
第 132 号
発行責任者 午 來 勝 顕
編集責任者 島 田 祥 司
発行所 ライト印刷



かつて経験のない

相馬市教育委員会教育長 福地 憲 司

令和 2 年 4 月 27 日、コロナ禍の中で、相馬市教育長を拝命した。災禍時に思い起こすのが、勿論東日本大震災及び原発事故だ。

平成 23 年、福島市議会開会中の 3 月 11 日、当時学校教育課管理担当主幹だった私は議場脇の控室のテレビのモニターで議員の質問を聞きながら、答弁書の聞き取りに余念がなかった。

「ドカン」『かつて経験のない』揺れは突然やってきた。私は窓越し遠くに高層の、柔らかくしなるマンションを見た。「同じなんだ・・・」大きな揺れの中で、なぜか小さい頃、鉛筆の端をつまんで揺らしながら、「何で曲ってるのかな」と不思議に思ったのを、こともあろうにこんな時に思い出していた。

市役所が昼夜を問わず人々人々人々でごった返すことを誰が想像できただろうか。教師である私が、市役所のフロアに寝泊まりする避難者に対して、市役所職員として食糧を配給することになることを想像できただろうか。

やがて、終わりのない長い長い復興への長い長い取組が始まった。

教育に携わる者として、子供たちがこの状況を乗り切り、そして福島を切り拓いていくために、子供たちにどういった力を付けさせるのか。

『かつて経験のない』コロナ禍の中で、教育長として何を為すべきか。あらためて、相馬市の「力強く生き抜くひとづくり」の基本理念を再解釈しているところだ。



学校のオーナーは地域

相馬地方小学校長会副会長 村田 権 一

昨年度末からのコロナ禍の中、校長先生方は例年とは違った学校経営にご苦労されてきたことと思う。それは、先が見通せない不安の中で、新しい生活様式を踏まえ、いかにリーダーシップを発揮し、安定した教育活動を行うかという苦勞であると考えます。

先般、本校で学習発表会を実施した。各学年毎に発表を行い、保護者の参観も 2 名に制限した。自分の学年以外は、アプリ配信を使って教室で鑑賞するようにしたので全職員での運営ができなかった。そこで、大きな助けとなったのが PTA と地域の協力である。600 名以上の保護者の検温、入替時の座席の消毒、殆どのことを保護者が積極的に行ってくれた。地域の方々からは、子供たちのためにできる範囲で学校行事を行って欲しいと励ましの言葉も頂いた。学習発表会の翌週ある担任から、子供たちの顔が変わった、明らかに生き生きしているとの報告を受けた。久しぶりの学校行事に、手応えと嬉しさを感じた。学校は、子供たちと教職員だけでは成り立たない、ということを改めて感じた瞬間でもあった。

私の初任地は、秋になると林檎の香りが漂う山の上の小さな小学校であった。子供たちは林檎の里で生まれたこと、自分の学校がそこにあることに誇りを持っていた。今この様な状況だからこそ、今まで以上に保護者・地域と密接に手を携えて学校経営を行っていくことが求められている。そして、東日本大震災・原発事故、コロナ禍を経験した我々だからこそ、子供たちに、自分が生まれたり育ったりした学校・地域に誇りを持たせ、高校卒業後の将来に希望を持たせる使命があるように感じる。「相馬プライド」を持つ子供たちが、数多く育っていくような小学校教育を実践したいものである。

私の学校経営

「今、できることを！」

南相馬市立原町第二小学校 志賀 英司

令和元年度3学期のスタートの時、今の現状をだれが想像できたでしょうか。放射能以来、また目に見えない物との戦いが始まった。

「元気よく、あいさつができる児童」「笑顔ある職場」「特色ある学校」づくりが私の学校経営の骨子であり、何よりも、子どもの安全を最優先にこれまでも取り組んできた。原二小は元気の良いあいさつができると評判の学校だった。しかし、長期の臨時休業を終え、再スタートしたとき、あいさつがなくなっていた。友だちとの交流もなく、外出もできない、家の中での生活ばかり。そして、追い打ちをかけるように、1学期の各種行事が中止。できないことばかりだった。ある日、校庭でマスクを付け、元気に全員リレーをしている学年が幾つかあった。一生懸命走る児童がいて、大きな声で応援する児童を見ているうちに、子ども達はこんなに元気じゃな



いか? 「できない。」ではなく「今、できることは何?」かを考え、実行することが子ども達を元気にするのではないかと発想の転換を行った。2学期になり、宿泊活動。遠足。学習発表会。「ひばりっ子元気いっぱいプロジェクト」は今年初めて実施する事業。陸上競技場や公園で、縦割り班で計画した活動を楽しむ事業である。行事や活動することを通して、子ども達は元気を取り戻してきており、大きな声であいさつができています。今できることをがんばろう!

学校紹介

研究校としての歩み

新地町立新地小学校 高橋 澄子

明治5年2月、地域11ヶ村の有志54人が結集し、共立学校の設立に着手。同年5月、学制頒布に先立ち新地の地に小学校が開校しました。校名は広い海に心を開く目を養う意をこめての「観海堂」。これが新地小学校の前身で、今年で148周年を迎え、これまでに約6000名の卒業生を輩出しています。現在の児童数は195名ですが、最も多かった昭和21年には1019名が在籍していました。

沿革誌を遡ってみますと本校は相馬郡や県小教研の指定校となり、図画工作科や理科、教育評価(こんな部会もあったのですね)、音楽科の研究発表を行ってきました。そしてここ10年は総務省「地域雇用創造ICT絆プロジェクト」を皮切りに、様々な実証事業に取り組みながらICT環境を整え、児童一人一台のタブレット端末を配備してICT活用の研究を継続してきています。今般のコロナ禍にお

いて、整備されたICT環境はオンライン授業もでき、時代の先端をいく教育を目の当たりにしました。

これまで各研究を行えた陰には保護者の理解と協力があり、PTAは日本PTA連合会表彰、優良PTA文部科学大臣表彰を受賞。正に学校・家庭、さらには福島県で最初の小学校「観海堂」を創設した地域の学問に対する情熱が一体となって、本校の研究を支えてきたと言っても過言ではありません。この歴史を継承し、未来に繋いでいきたいと思ひます。



随想

「ジョギングシューズを履く！」

相馬市立飯豊小学校 永峯 秀桐

今から3年前、「信夫山パークマラソン」のポスターを見て、人生初のマラソン大会に参加しました。距離は10km。体力はまずまずあるほうだと自信もっていましたが、スタート直後のいつまでも続くと思われる上り坂に早くも崩れ去りました。数百段もある階段、ウッドチップや木道、信夫山をぐるぐる登ったり下ったり、自分よりも年齢が上の人にどんどん抜かれ、自分の甘さを痛感した大会でした。しかし、走りきった、頑張り抜いたという満足感や爽快感は、その後の極楽湯と一杯のビールを何倍もの幸せの時間にくれました。この一つの経験が次の大会への参加意欲を高めてくれました。

それから、週末に何キロか走り練習し、いくつかの大会の10kmコースにエントリーし、順位は全く遅いのですが完走をすることができました。テレビで駅伝ランナーに沿道の人が「頑張れ」と応援をしている人にはそんなに届かない、響かないのではないかと感じていましたが、実際に走ってみると沿道の人声援はしっかり聞こえ、確かな力になることが分かりました。声をかけてもらうありがたさを感じることができました。また、大会を運営する事務局の方や盛り上げてくださる地元の人等、大勢の人のお陰で大会が成立していることを知りました。

今年は、新型コロナウイルス感染防止のためマラソン大会は中止になってしまいました。目標がなくなり、週末の走りはさぼり気味になっています。いつかきっと大会が再開され、走れる時がくるでしょう。ほんの一時の満足感と爽快感を味わうために、またジョギングシューズを履きますか!



「朝の校門の前にて.. 思うこと」

相馬市立磯部小学校 齋藤 和彦

二月も終わりに近づくと、手の沢池で冬を過ごした白鳥の一群が北の国へ帰る準備を始めます。朝陽に光る校舎の遥か上を横切って見事なV字隊形で飛んでいきます。これから何千kmもの距離を飛び続けるための知恵(本能)です。幼い仲間をかばうように、隊列に子どもを挟んで気流を乱さないように飛ぶ練習を積んで飛び立つのだそうです。

青い空に浮かぶ白い点々が小さくなり、通学路の上り坂に目を移すと、皆さんの登校班がいつものペースで坂を登ってきます。下級生を間に挟んで、前後の上級生が歩幅を縮めてゆっくり。(上級生の体の後ろで冷たい風を遮ってもらおうように。)

自分もそうしてもらったことが今、あたりまえにふるまう皆さんの姿。私の大好きな磯部の光景のひとつになりました。【以上は卒業式式辞の冒頭より】

今年も変わらずこの光景を魅せてくれる子ども達。きっと白鳥もまたやって来ることでしょう。コロナ禍にあって、新しい登校班の指導が十分ではなかったにもかかわらず、日々の習慣が意味ある規律となって身につけていることが見て取れます。その原動力はいうまでもなく子ども達個々の自覚と責任感に他ならない。すばらしいことです。

去年は控えめな挨拶で最後尾を歩いてきた女の子が、今年はひとつ手前の交差点からも聞こえる声で「おはようございま〜す!」ほぼ車登校だった兄弟が今年自分の足(自分の意思)で学校に来ています。から元気の挨拶はするものの“本当はあまり元気じゃないんだけどなあ”という子もいる。そんなサインが読み取れたなら、すぐに寄り添える学校の仲間であってほしいと思ひている今朝この頃です。

